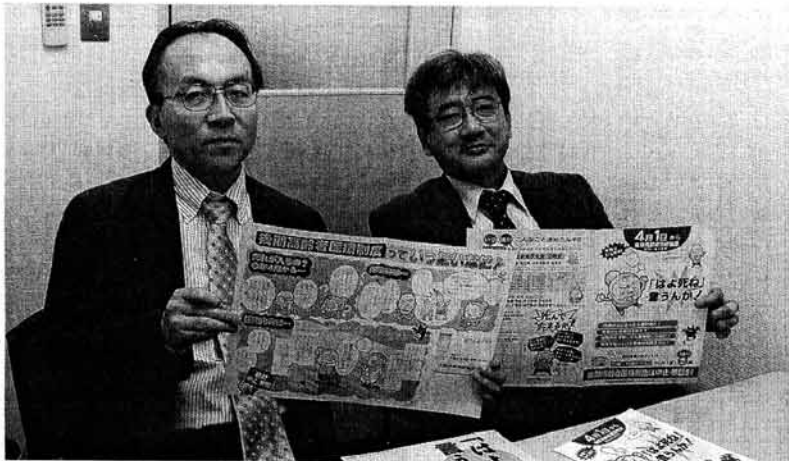


後期高齢者医療制度 「誰が決めたんや」

「受診がまん」患者ため息



リーフを広げる大阪府保険医協会の人たち＝大阪市

「はよ死ぬ」言うんか！ 高齢者の怒りの表情のイラストとともに目に飛び込んでくる文字。後期高齢者医療制度の問題点をズバリ解説した大阪府保険医協会、大阪社会保険推進協議会が共同で作成したリーフレットが好評です。

いま七十五歳以上の高齢者には、今年四月一日から施行される後期高齢者医療制度について各府県の広域連合議会から、お知らせが郵送されています。しかし、細かい文字や表、難解な文書となっていて、「当事者である高齢者に配慮し

たものとはなっています。寺内順子事務局長。社保協は一月下旬から街頭宣伝で配布。連日、はがきやファクスで怒りの声が、同社保協に寄せられています。「若い頃から一生懸命働

リーフで問題点ズバリ 大阪府保険医協会・社保協が作成

いてきて、年若いければ万円の年金収入で暮らす甲状腺疾患の手術をした八十歳の女性は、ひざと腰の痛みがあり、医療費が月々一万円かかります。お風呂は週一回でがまん。食事はヘルパーさんに千円分のおかずを買ってきてもらい三日間で食べます。負担が際限なく増えていることに女性性は嘆息し、「これから受診を」がまんしないといけない。せいたくしたいとは思わないけど、葬式代は残したい」と話しました。

寺内事務局長は「はよ死ぬ」言うんか！ という言葉は、思いついた言葉ではなく、高齢者から寄せられた生の声なんです」と語ります。

リーフでは大きな文字で、▽七十五歳以上になったら強制加入▽年金から保険料天引き▽保険料を滞納したら保険証取り上げ▽保険で受けられる医療が制限される」と告発。

リーフは開業医の窓口にも。守口市で開業している橋本忠雄医師(68)は、患者さんや家族でつくる「世話人会」の会合でリーフを配って説明しました。「困ります」「こんな制度、誰が決めたんや」と怒りの声が続出しました。

橋本医師は往診患者にもリーフを手渡します。月七

「収入は減り税負担は増えるなか、医療まで切り詰め、庶民生活はもう限界を超えている。政治家は現場を見にこい！と言いたい。私ら医師が広く市民に訴えていく運動は、いまが正念場やと思っています」

府保険医団体連合会の尾内康彦事務局長次長は、リーフを裏返して「死んでたまるか！」と記された隣が請願はがきになっているのを指し、「国に、お年寄りの痛みを知ってもらわな。リーフを活用して運動を盛り上げたい」と語ります。

「九十七歳の義母の年金は三万円。入院中の病院にもいられなくなるのではとすごく心配です。私たちが(夫婦)は六十歳代で商売を二人でしていますので、母をみてやりたいでもできません。長生きが罪悪感と思わされる制度は絶対に廃止を」

二日放送の「サタデーばっと」(TBS系)で橋本医師の活動がクローズアップされ、みのもんた氏(司会)は「痛くてもつらくてもがまんする、自分たちが(これから)行く道をそんな道にしていいのか?」「政治を変えろしかないじゃないですか」とコメントしました。